

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：35305
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23820077
 研究課題名（和文） 鴨長明の総合的研究

研究課題名（英文） A general study of Kamono-Chomei

研究代表者

木下 華子 (KINOSHITA HANAKO)
 ノートルダム清心女子大学・文学部・講師
 研究者番号：10609605

研究成果の概要（和文）：

本研究によって、学会発表 1 件、図書（共著）1 点、論文（単著）4 本を公表した。鴨長明という、日本文学史上大変重要な作家について、見過ごされがちであった和歌という視点を導入し、代表作である『方丈記』『無名抄』及び和歌について、また鴨長明の作家像について、新たな知見を提示できたものと考えている。

研究成果の概要（英文）：

By a study, I announced one presentation at the meeting, book (joint work) one point, article (single work) four. I introduce the viewpoint called the 31-syllable Japanese poem which was apt to be overlooked about a very important writer in a Japanese history of literature called Kamono-Chomei. I think that I was able to show new knowledge about a writer image of Kamono-Chomei and his masterpiece “Hojoki” “Mumyosho”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：中世文学、和歌、鴨長明、方丈記、無名抄

1. 研究開始当初の背景

鴨長明は、中世文学史上、ひいては日本文学史上に『方丈記』という作品を刻みつけた作家である。長明には、『方丈記』『発心集』『無名抄』の散文作品、及び、『鴨長明集』『正治後度百首和歌』他、勅撰集・私撰集に収められる和歌、歌合への出詠歌といった作品があり、韻文と散文にまたがる著作活動を展開した人物であるが、従来、数多く積み重ねられてきた先行研究のほとんどは、『方丈記』『発心集』の作品研究と伝記研究に限られて

いる。伝記研究では、三木紀人氏『閑居の人 鴨長明』（昭和 59 年、新典社）が諸研究の成果を踏まえた一つの到達点となっており、『方丈記』『発心集』の作品研究では、築瀬一雄氏『方丈記全注釈』（昭和 46 年、角川書店）、三木紀人氏『方丈記 発心集』（昭和 51 年、新潮社）等で全注釈が整備され、多くの研究論文が生み出されてきた。しかし、長明はその一生を歌人として過ごし、『新古今和歌集』撰集にもかかわった人物である。長明にとって、歌人であることは非常に重要なア

イデンティティーであったにもかかわらず、和歌と長明との関わりを本質的に論じた試みは少ない。このような状況に対し、本研究では、同時代の知識人同様、長明は歌人であり、その方面からの作品へのアプローチ・作家研究は不可欠だと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、鴨長明について、作品研究及び作家研究を行うものである。前述の1の視点に基づき、本研究では、長明及びその作品について、歌人・和歌という重要な側面を加味することで、表現意識や作品構想を多面的に検討する。最終的には鴨長明という作家と作品の新たな文学史的意義付けを行うことを目的としたものである。

3. 研究の方法

全体は、(1) 歌論的随筆である『無名抄』の基礎研究、(2) 長明和歌の作品研究、(3) 『方丈記』の作品研究、の3点から成る。具体的には、以下の通り。(1) 『無名抄』について、現存する伝本を網羅し、校本を作成する。(2) 鴨長明の和歌を解釈し、詠歌の全貌を明らかにするとともに、その和歌観を探る。(3) 『方丈記』の摂取調査を行い、作品の表現基盤と構想を浮かび上がらせる。

4. 研究成果

(1)

『無名抄』諸伝本については、国文学研究資料館のマイクロフィルムで本文と書誌事項の確認を進め、『無名抄』の校本を作成する上での基礎的なデータの蓄積をはかった。今回蓄積した伝本は下記の通りである。

- ・国文学研究資料館初雁文庫蔵本(2種)

函架番号: 12-355、35-24-5-2

- ・宮内庁書陵部蔵本(3種)

函架番号: 152.386、206.599、154.556

- ・愛知教育大学蔵本 函架番号: 914.4W4

- ・今治市河野美術館蔵本(3種)

函架番号: 332.634、332.640、332.656

- ・大阪天満宮蔵本 函架番号: 59-4

- ・篠山市教育委員会青山会文庫蔵本
函架番号: 152

- ・熊本大学附属図書館細川家北岡文庫蔵本

函架番号: 107-36-2

- ・肥前島原松平文庫蔵本

函架番号: 117-35

(2) 鴨長明の和歌については、(1)の『無名抄』のデータ蓄積と並行して、その和歌や

歌論に現れる和歌観を分析し、その成果を中世文学会第113回大会で発表、さらに機関誌『中世文学』に採用された。

鴨長明の和歌に関する著作である『無名抄』中、最も長大な章段である「近代歌躰」は、多くの先行研究が指摘するよう、長明の歌観が窺われるものである。また、直前の「式部赤染勝劣事」をも併せ見ると、この二章段は先行する歌論書・歌学書に典型的な文体(問答体)を採り、長明が良き歌とは何かを問い、意識的に自説を展開したものと考えられる。「式部赤染勝劣事」では、和泉式部の歌二首の勝劣を検討するに際して長明が用いた美術工芸の比喩に着目する。それを同時代までの歌人たちの言説と比較すると、長明の和歌の師・俊恵の言説に代表される「分析的認識」と藤原俊成の言説に代表される「一体的認識」とでも言うような二つの歌観を見出すことができた。長明は、この二者を「分析的認識=詠作時の心の働き」と「一体的認識=出来上がった一首としての価値」という二つの次元に振り分け、両立を図ったのであった。「近代歌躰」では、「中比の躰」と「今の世の歌」(=新風)という対立的な二項を用いて歌の様の歴史的推移や良否を論じるが、長明の意図は両者の対立の解消にある。それを可能にしたのは二者を『古今和歌集』の下に位置づける方法であり、その重要な鍵語が「幽玄」であった。「幽玄」は「今の世の歌」の出自が『古今集』にあることを導く道標となり、さらに「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」の業平詠を媒介として俊恵と俊成の言説、即ち「中比」と「今の世」を結ぶ蝶番の役割を果たしている。つまり、長明の和歌観の特徴とは、対立する二つの歌観・歌風を両立し、ともに肯定するところにある。このような自説展開の動機としては、『吾妻鏡』に見える建暦元年の鎌倉下向という外的な要因と和歌世界における自己確認という内的な要因を指摘できる。それは、『無名抄』執筆動機的一面として考え得るものである。

本発表及び論文は、日本文学史・文化史において大きな水脈を為す「幽玄」の語を、和歌史を叙述するための役割的側面から捉え返した斬新な論であり、『無名抄』という作品生成の必然性を解明する作品研究の本質に切り込んだものである。

(3)

『方丈記』の作品研究については、3本の論文を公表した。

第一は、雑誌論文「『方丈記』が我が身を語る方法」(『国語と国文学』89巻5号)である。家居の記の文学史の中で、『方丈記』は作者長明が我が身を振り返り、人生を概括するという自らをめぐる叙述に紙幅を割く傾向があ

り、そこには長明の意識的な叙述方法を看取できる。まず、長明は自らの来歴を語るに際して『源氏物語』を鋳型として用い、光源氏の須磨流謫と自らを二重写しにする方法を用いていることを解明した。さらに、自らを「みなし子」とし、父の死を出家・遁世に至る人生の起点とする考え方に対して、寂然の『法門百首』73・74番歌が仏教的根拠と言葉を付与していることを明らかにした。このような方法は、和歌の詠作における本歌取り・本説取りの方法に通うものがあり、長明が『方丈記』を記す方法は、後鳥羽院の新古今歌壇における経験から醸成された可能性が高い。また、如上の方法は読み手の理解なしには成立し得ず、『方丈記』の強い対他性を証明している。本稿では、そのような読みを行う素養を持った草庵の遁世者たちを『方丈記』の享受者とし得る可能性も併せて示した。

第二は、『文学』（隔月刊）13-2号に発表した雑誌論文「『方丈記』終章の方法」である。『方丈記』研究史において最も難解とされ、論争の対象となってきた終章について、解釈と思想史的位置付けを行ったものである。先行例や同時代の作品との比較から、終章とは、家居の記の文学史において先蹤であった「謙辞」の枠組みを用い、物事の理を明らかにするための「問答」という叙述方法を用いた言説空間だと考えられる。その「問答」では、自らを維摩詰と周利槃特に重ね合わせ、問答に沈黙することで「維摩の一黙」を彷彿とさせながら口業を破る自らを批判してみせ、阿弥陀仏への帰依の言葉「不請阿弥陀仏」をもって作品を終結させるという方法を取った。終章の表現は法然ら同時代の念仏行者の言説と通底し、『方丈記』に見える信仰・思想の様相は、それらと近い、または同じ圏内のものである。これは、「謙辞」が用いられたことと併せ、「告白の文学」と見なされがちであった『方丈記』が、読み手に向けて開かれた作品であることを意味する。その読み手としては、草庵に暮らす念仏行の遁世者たちの可能性が高い。従来、読者が特定されず、執筆の動機・背景も不明であった『方丈記』という作品が成立する場を明らかにし、新たな読みと作品の意義を問うことができたと考えている。

第三は、論文「「世の不思議」への視線—『方丈記』の記憶と文学性—」（国文学研究資料館創立40周年特別展示「鴨長明とその時代 方丈記800年記念」図録、2012年5月）である。本論文では、『方丈記』における災害や事件の記録が俯瞰的な表現を取り、絵画的なイメージを付与する表現を積極的に行っていることを分析し、それが同時代の仏教

説話画の享受と深く結び付くことを解明した。また、そのような表現は、現実の景をどのように捉え直し、いかに書くかという、実に文学的な営為から生まれたものである。関東大震災・東京大空襲・東日本大震災と、『方丈記』が災害時の認識の原型たり得てきた事実は、一見客観的な記録とは乖離するような文学性が、惨事の記憶が継承され、表現される事態の普遍的な一面であると問題提起した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①木下華子、『方丈記』終章の方法、文学、査読有、13-2号、2012年3月、pp. 94-110
- ②木下華子、『方丈記』が我が身を語る方法、国語と国文学、査読有、89-5号、2012年5月、pp. 57-72
- ③木下華子、「世の不思議」への視線——『方丈記』の記憶と文学性——、国文学研究資料館創立40周年特別展示「鴨長明とその時代 方丈記800年記念」図録、2012年5月、pp. 105-111
- ④木下華子、鴨長明の和歌観——『無名抄』「式部赤染勝劣事」「近代歌躰」から——、中世文学、査読有、2013年6月刊行予定、58号、pp. 53-63

〔学会発表〕（計1件）

- ①木下華子、鴨長明の和歌観——『無名抄』「式部赤染勝劣事」「近代歌躰」から——、中世文学会113回大会、2012年10月

〔図書〕（計1件）

- ①木下華子他、国文学研究資料館創立40周年特別展示「鴨長明とその時代 方丈記800年記念」図録、2012年5月、全130頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

①木下華子、NDSU Collection [14] 黒川文庫『無名抄』、ノートルダム清心女子大学 Bulletin176号、2012年5月

http://lib.ndsu.ac.jp/www/collection/images/NDSUcollection_JPG/NDSUcollection_14.jpg

②木下華子、古典の現在性—『方丈記』800年に思う—、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学科リレーエッセイ 108回、2012年10月

<http://www.ndsu.ac.jp/department/japanese/blog/2012/10/essay108.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下 華子 (KINOSHITA HANAKO)

ノートルダム清心女子大学・文学部・講師

研究者番号：10609605

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：